



アメリカ南部で暮らすということ

かも よしのり
賀茂 美則

●ルイジアナ州立大学社会学部・教授 学部長

前に行くゼロ戦をアメリカの戦闘機が追尾している。ぴったり後ろにつかれ、ゼロ戦は絶体絶命だ。機関砲が火を吹き、ゼロ戦は煙を吐いて落ちて行く。

1991年12月、ルイジアナ州バトンルーージュ。僕の住む街での出来事である。ミシシッピ川沿いの土手で見物している観客が歓声をあげる。当時4歳の長男が「アメリカン航空と日本航空が追いかっこしてるんだね」と感想を漏らしたので、こっちはちょっとホッとする。

真珠湾攻撃50周年の記念式典。どう反応しているかわからない周りの友人にこぼった笑いを向けて家路につく…。

その3年前に「ルイジアナ州立大学ですが、助教職の候補者として面接に来ていただきたい」と電話を受けた僕は、「ルイジアナなんて申し込んだかな」と訝り、60以上申し込んだ大学のリス



州会議事堂の展望台から見たダウンタウンとミシシッピ川
(ゼロ戦が「撃ち落とされた」のはここ)

トを探したものだ。自分でつけた「希望の大学ランキング」によれば、最低の「Cランク」だった。

1989年、それまで6年間住んでいたシアトルからレンタルしたトレーラーに荷物を積んで2週間かかってアメリカを縦断した。行程はちょうど4,000マイル、6,400キロ。稚内と鹿児島を往復してもまだお釣りがくる。ガソリンを補給したミシシッピ州のスタンドでは、経営している黒人の一家に物珍しい目でジロジロ見られたものだ。

とんでもないところに来てしまった。ところが、とんでもないことは続けて起きる。

1992年、名古屋から来た高校留学生、服部剛丈君がパーティ会場を間違えて家主に射殺されてしまった。俗にいう「フリーズ事件」である。頼まれて裁判でお父さんのためにボランティアで通訳をした。評決の瞬間に間に合わず、日本人の新聞記者が「無罪！」と叫びながら走り出して来た時は法廷の外。ご両親が「銃規制署名」を携えてクリントン大統領を訪問したおかげもあって、ブレイディ法が成立した（僕も通訳としてホワイトハウスに同行した）。それでも剛丈君は戻ってこない。さすがにこの「無罪評決」の時には南部を脱出しようと思ったものだ。

2005年には隣町、ニューオーリンズをハリケーンカトリナが直撃し、その避難民が僕の街にも大量にやって来た。「日本人被災者のためのカトリナ基金」を立ち上げ、8万ドルを160家族に配った。援助した一人から「隣の台湾人は政府からも

っともらった」と苦情を言われたり、活動をやっかんだニューオーリンズの日系人からの通報で、「脱税」の疑いでFBIの取り調べを受けたりした。

バトンルージュとその近郊では年間100人弱が殺人事件の犠牲になる。割合はニューヨークの7倍。2016年には罪のない黒人が白人警官に職務質問の末に射殺され、2週間後には報復として3人の警官が射殺された。翌月には1000年に一度の大洪水に襲われ、15万軒が浸水した。全くもってとんでもない街である。

そんな街に暮らしてそろそろ30年。どうして未だに引っ越さないのかって？ 何と言っても空が広い。車で5分走れば遊歩道が完備されたただっ広い野原があり、川沿いに歩けばこれまた広い公園がある。家から反対方向に車で10分走るとこれまた広いドッグランがあり、暑い日は横の池で犬たちが悠々と泳ぐ。

亜熱帯なので1年中外にいられる（暑い夏は日本に避難すれば事足りる）。何年に一回か、何かの間違いで雪が降ったり、路面が凍りでもしようものなら学校や官公庁はすぐに休みになってしまう「ヘタレ」もまた良し。大学が何週間か後の土曜日に設定した「代講日」なんて誰も来やしない。

「南部の人懐っこさ」と言われるくらい、みんな愛想が良い。近所を散歩すれば「おはよう」の声がかかるし、何かの拍子に隣り合った人と会話が始まることもままある。東日本大震災の折には募金のために作ったTシャツを地元の人から「援助したいから売ってくれ」と申し入れがあり、最終的には1,500枚も売れて、300万円近く寄付できた。

金曜の帰宅ラッシュは2時過ぎに始まり、平日の3時過ぎから子どもの野球の試合でもあろうものなら選手の父親が雁首揃える呑気さ。物価は安いし、住宅も広い。庭に木が生い茂るわが家は今売っても2,000万円ちょっとにしかならない。

ガンボ、ジャンバラヤ、茹でたザリガニなど、自他共に認める全米で一番美味しい料理（ちなみに、おなじみのタバスコソースはルイジアナ州の名産）。リオのカーニバルと同時にあるルイジアナの祭り、マルディグラはアメリカ最大の規模の

パレードで、山車からビーズのネックレスをこれでもかというほど大量に投げってくれるので、大人も子どもも楽しめる。

地元の大学、LSUのフットボールの試合には10万人が集まる。大学は朝からスクールカラーの紫と黄色に染まり、あちこちで思い思いのバーベキューパーティ。釣りも有名で、近くの内湾では場合によっては1m近いのが釣れる。新鮮な刺身や干物、さつま揚げは美味。

東に4時間走った先にあるフロリダの真っ白い海岸で海沿いのコンドミニアムを借りればちょっとしたセレブ気分。西に15時間走ればロッキー山脈のスキー場もあり、マルディグラの休暇はルイジアナのスキー客で貸切になる。子どもたちが通った学校の同級生や親、100人以上が同じスキー場に集合して、夜は勝手に友だちのコテージでパーティ。スキーの腕を生かして、長男はニセコのペンションでアルバイト、次男は梅池でスキー学校の先生をして冬場を3年間過ごした。

そしてバトンルージュで何よりも一番いいのは「しがらみ」がないこと。参加強制の町内会やPTAはないし、家族のゴタゴタも縁がない。隣が何をしようが誰も気にしない。人の悩みの7割だけは人間関係が原因らしいけれど、煩わしい関係が初めからなければ悩みようがない。

ルイジアナはいいところだけど、シアトルも美しい。そう言えば東京は便利で文化があるし、大阪は食べ物が美味しい。住めば都とはよく言ったもの。人間、気の持ちようで世界中どこでも楽しく過ごすことができる、というのが結局35年間の海外生活で学んだ一番大事なことであるようだ。



今日も大漁
(近くの海で釣れた魚と筆者ら)